

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。〕

自己 評価	外部 評価	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域密着サービスの意義をふまえた事業所の理念を作り、管理者と職員はその理念を共有して実践に繋げている。	法人の理念に加え、ホームとしての4項目からなる理念があり、来訪者の目にふれる玄関に掲げられている。理念を圧縮した「明るく、楽しく、元気よく」、「その人らしく輝いて」、「優しい心で」、「地位に根ざして」というスローガンを職員も実践しており、何よりもサービスを受ける利用者が職員の接し方に満足している。職員は更に会議などで理念を振り返り常に初心に戻っている。利用を希望する方や家族にもパンフレットに記載されたホームの理念を説明し、ホームの姿勢を示している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近所の方との日常の挨拶、清拭用布の寄付の依頼、保育園との交流会、お祭り見物(祇園、上田わっしょい、七夕)避難訓練時に自治会役員の参加の要請等つながりは広がっている。	通りを隔てたはす向かいに地区の公民館があり、自治会にも加入し、お祭り等の寄付も納めている。公民館の庭で行なわれる獅子舞や神輿の披露を利用者も見に出掛けている。毎月、近くの保育園の年少組の園児が訪れ、歌などで利用者と交流している。中・高校生のスプリングチャレンジやサマーチャレンジ、高校生・専門学校生の実習なども受け入れている。傾聴や読み聞かせ、音楽、食事づくりのボランティアも訪れている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	月1度の傾聴ボランティア、毎週見える音楽ボランティアの受け入れ。高校生、専門学校生の実習の受け入れ、サマチャレ・スプチャレの受け入れをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用者代表、家族代表、民生委員、市高齢者介護課、地域包括支援センター、職員1名、管理者が参加し年6回を目標に開催している。	奇数月に開催している。入居者の状況やホームの活動状況、行事予定などを中心に話し合い、参加者から意見・助言などを頂いている。地域の委員から防災訓練に参加した際に気づいたことなどを報告していただき、改善に向けて対策を立てるなど、いただいた意見や助言を職員会議で検討しホームの運営に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	法人と市は密接に連携を取っている。運営推進会議の中でも活発に意見交換され、協力関係を構築するとともに常にサービスの向上に取り組んでいる。	同じ法人の運営する市内の他のグループホームと共同し受診の付き添いに伴う人員配置等について問合せをするなどホームの運営上でわからないことがあれば相談している。利用者の介護保険の更新の際には申請の代行をしたり認定調査員の調査の折にも協力している。市派遣の介護相談員の受け入れも年4回行い、利用者の意向等を帰りに報告していただいている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施錠しないホームを目指し、玄関にセンサーを設置し昼間は扉を開けている。ベッドの下にはコールマットを敷く等工夫し、ベッドに柵をせず拘束しないケアを目指している。	日中、玄関のドアは開錠している。毎年、法人として身体拘束に関する研修が行われており、法人内には職員による身体拘束委員会もあり、利用者の行動の抑制や身体拘束をしないケアについて職員は十分理解し実践している。外出傾向の見られる利用者にはホーム近くを散歩し、気が休まるまで対応している。	

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連法をファイルし、読み合わせを行っている。高齢者虐待のビデオ学習を行い、虐待の徹底防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護事業や成年後見制度についての資料の読み合わせを行っている。社協の財産管理事業を利用しようとしている入居者がいて手続きの仕方などを学んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	重要事項の説明等を詳しく行い、入居前には施設見学をして頂き、納得したうえで契約の手続きをしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情相談の窓口、第3者委員は重要事項説明書に明示されており、契約時に家族、入居者に説明されている。玄関に意見箱が設置されている。面会時には積極的にホームでの様子をお話しし意見の言いやすい雰囲気づくりに心掛けている。	利用者の意向に沿い買い物に出掛けるなど利用者の意見や要望についてはくらしの中の衣・食・住に関することを主に声がけしそれに沿うようにしている。利用者が心身の状態に自ら不安を感じているような時には不満や苦情を言葉や表情で表わすことがあるが、来訪する家族は「家にいた時よりいい顔をしている」と伝えており、ホームで穏やかに過ごしていることが窺える。新年会と敬老会を兼ね家族会が開催されており、家族からの意見や要望などを聞き入れている。毎月一人ひとりの利用者の生活の様子を担当職員が書き記し、また、3ヶ月ごとにホーム通信を発行し家族との意思疎通を図っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	常に各職員の意見を聞き、運営に反映させている。	毎月ホームのサービス会議が開かれており、法人からの連絡、委員会からの報告、カンファレンスなどが行なわれている。知識の豊富な若い職員が多く、新しい発想で懸命に利用者の支援に当たっており、何でも言いあえる職場風土が醸成されている。法人として人事考課制度の最終試行段階に入っており、目標管理シートをもとに年2回管理者との面談が行われている。年度末が近づくと異動などの希望を職員から聞いているが、ホームでの勤務を継続を希望する職員も多い。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人として就業規則に則り勤務状況を管理している。個々の目標を管理者が集約し達成できるよう配慮している。法人の人事評価制度を理解し26年度から開始できるよう準備中である。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修は法人内外の復命のほか、3段階に分けられている職員基本研修Ⅰ、Ⅱを全職員が終了している。外部の研修にも積極的に参加するよう促している。		

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣のGHと相互評価事業を行い交換研修を行っている。法人内のGHとの交換研修も3年目になり全職員が2日ずつ交換研修を行い自施設のケアに生かしている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス開始前に本人と面接を行い、本人自身の訴えや願いをよく聞き、受け止めるように努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初期段階から、困っている事や望みの生活を聞き、安心して利用して頂けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談の段階では、まず本人・家族の話をよく聞いて、内容によっては他のサービスの活用を進めることも考え対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	昔ながらの風習や料理、方言などを入居者に教えて頂き職員同士情報を共有している。、移動などで職員の交代があってもさ支えあう関係づくりがスムーズになされている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の日々の様子や変化など報告し、支援の方法や対応について意見を交換している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人や家族と会ったり、ご自宅や周辺などなじみの場所に出かける機会を作っている。面会時には日ごろの様子を伝えたり、一緒に過ごせるよう対応している。	自宅の近所の方が家族とともに来訪している。家族とともに馴染みの温泉やラーメン屋、食事処に出掛ける利用者もいる。月に1回自宅で泊まる方や家族の送迎によりお墓参りのため一時帰宅する利用者もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	仲の良い利用者同士が交流を持てるように心がけている。また孤立しがちな利用者には調理、盛り付け、洗濯物たたみなどをお願いし皆の輪の中に入れるようにしている。		

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	相談があれば対応する。終了する際に、利用者やその家族にその旨をきちんと伝えるように心がけている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人一人の希望を聞きながら支援している。意志疎通が困難な利用者には家族などから情報を得て支援している。	一人ひとりの好きなこと、できることを主に意向を聞いている。利用前の情報から作業やレクリエーション、ゲームなどへの参加も働きかけている。長く趣味の活動をしていた方も他の利用者に教えることは難しくなっているという。タオルたたみやサラン布巻きなど職員が探した作業をやっていたケースが増えている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター法式を使用したり、家族からの聞き取りや以前利用していたサービス事業者から情報を得る等して個々の生活歴を把握するよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々、勤務交替の際の申し送りや記録によって情報を共有し、対応を考えている。月に1度サービス会議を開催し、一人一人に合う暮らしとそのための支援を検討している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成者を中心とし、本人・家族の意見を聴いたり、個々の担当職員ごとに毎月モニタリング表を記入してもらい、月1回の会議で検討している。	職員は1、2名の利用者を担当しており、モニタリング表で目標の進捗状況を毎月振り返り、サービス会議に諮っている。基本的には6ヶ月に1回見直しをかけており状態に変化が見られた時には随時変更している。介護計画が変更された場合には本人や家族に説明し了承を頂いている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	些細なことも介護記録に残し、その場になかった職員にも情報が伝わるように努め、実践や計画の見直しに生かしている。また毎月のモニタリングでケアの見直しを行い実践している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族が高齢であったり、緊急の場合は通院介助をしている。(家族が診察の際医師に説明できないとの理由からも付添いが増えている。)		

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ホームサイドで考え付くサービス(傾聴、読み聞かせボランティア等)受け入れや、学生のボランティア、実習生や研修を受け入れ、日常生活に変化や刺激を加えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は基本的には御家族に依頼している。受診に際しては、情報提供書を書いたり、体調に変化のある時や家族の希望があった時は職員が同行している。	利用者のかかりつけ医については本人や家族の要望に沿っている。車椅子で行ける範囲に医院がありそちらを利用する方が多く、家族には日頃の利用者の状態がわかりにくい。ため職員が同行することが多くなっている。訪問看護師が週1回来訪し、利用者の健康管理や相談にのっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護ステーションと医療連携を結び、週1回の定期的な訪問によって各利用者の日常の健康管理に努めている。医療的な支援が必要になった際には医師や訪問看護と密に連絡を取り指示を仰いでいる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された際には、医療関係者と情報交換し、早期に退院できるように努めている。また入院中は時間の許す範囲で職員が見舞いに行きスムーズな退院後の生活ができるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	法人としての「看取りの方針」が作成されており家族、医師、訪問看護師、職員等関係者で話し合い検討されている。ターミナルケアについての同意書も家族から頂いている。平成24年4月には癌の利用者のホームでの看取りを行っている。	法人の指針が作成されており、利用開始時に本人や家族に説明がされている。病状の重度化や加齢等により実際の対応が必要になった時には家族、医師、訪問看護師、職員で話し合い連携を取っている。お一人の利用者の看取りを平成24年4月に行った。その際も職員と訪問看護師との連絡表を介し、看護師が医師とのカンファレンスを度々行ないこまめに対応した。職員は精一杯頑張り、満足のいく結果であったという。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年2回法人主催の救急法についての研修会があり、職員は必ず1回は参加するようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	訓練を年2回行っている。自治会の協力を得て避難訓練を行ったり、夜間を想定したシュミレーションも行っている。防災協力者2名に協力してもらい7月にはうえだ敬老園への避難訓練を実施した。	年2回の訓練には自治会役員の方も参加し実施されている。今年9月には法人の事業所一斉に地震想定訓練が利用者も参加し行なわれている。利用者もいざ避難となると半数近くの方が車椅子が必要となっているという。歩いて数分のところに母体ともいべき同じ法人の施設があり、万が一の場合は同施設の職員の応援を得ることができる。また、その施設の夜勤専門職員がホームの地元に住んでおり、防災協力者として活動に加わることができる。消火器の取扱い訓練をはじめ、毎月何らかのミニ訓練が行われており、備蓄も徐々に整備されている。	

グループホームぼうやま敬老園

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人の尊厳・情報保護について職員は理解しており、利用者の誇りやプライバシーを損ねるような対応や言葉かけはしていない。	職員は法人の人権委員会やサービス向上委員会が主催する研修に参加し意識を高めている。利用者の尊厳や人格の尊重についての法人としてのマニュアルも整備されており、職員全員で取り組んでいる。利用者の中にはプライドの高い方もおり、指示されることを好まない時もあるので一人ひとりの自尊心にも配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の会話の中から本人の思いを聞くように努めている。また本人に合わせた説明を行い、小さなことも自己決定ができるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員は話題の投げかけを通して入居者のその日の意向を把握するようにしている。天候を見ながら、希望者数名が近くの複合施設へのゴミ出しを兼ねた散歩やホームの買い物に車で外出している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人が着たい服を選ぶように支援したり、行事や外出の際、おしゃれをするなどしている。近くの系列施設での散髪サービスも利用している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	法人の栄養士が立てた献立をもとに独自にアレンジしたり、利用者の状態に合わせて刻み食・ミキサー食を提供している。また職員が同じテーブルで楽しく食事できるよう心掛けている。	全介助の方が約三分の一ほどおり、ミキサーやおかゆの方も同数となっている。食材によってはキザミの方もいる。利用者も大根をおろしたり、盛り付け、後片付け、茶碗拭きなど、できる限りのお手伝いをしている。日曜日の昼食はホーム独自のメニューで利用者の希望に応じている。ベランダのプランターでトマト、オクラなどを育て、家族からの大根、果物などの頂き物とともに食卓をにぎわせている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者一人一人の食事量、水分摂取量は把握されている。記録にも残されており。職員は情報として把握している。基本献立は法人の栄養士が立てており1日のカロリーは計算されている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に、口腔ケアを促し、必要によって介助をしている。また義歯の方は週2回洗浄剤で洗浄し清潔保持に努めている。		

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	必要に応じて、排せつ状況を記録し、パターンをつかむ努力をしている。それに合わせて、声掛けや誘導を実施している。	自立している方は若干名で、時間で誘導したり、着衣の上げ下げのお手伝いをし、トイレでの排泄や自立に向けた支援を行なっている。布パンツ使用の方は三分の一、それ以外の方はリハビリパンツとパットで過ごしている。夜間のみポータブルトイレを利用している方もおり、一人ひとりの状態に合わせ見直しもしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎朝飲むヨーグルトを飲んでいただき、食事には寒天やゼリーなどのデザートを食べて頂きスムーズな排便ができるように心がけている。またチェックシートを活用し薬でコントロールすることもある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は基本的には週2回行っている。それ以外に必要時や本人の希望するときに入っている。季節にはしょうぶ湯やゆず湯を楽しんでいただいている。	立位のとれない全介助の利用者もあり、シャワーチェアや二人介助で支援している。それ以外の方にも手順等一つ一つ説明したり、声掛けなどを行っている。週2回は入浴している。入浴時間は午後で、利用者の希望がある時には可能な限り応じている。行事外出として利用者と職員が市内の日帰り温泉に行き、家族風呂を貸しきり、全員が楽しんだという。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人の尊厳・情報保護について職員は理解しており、利用者のほごりやプライバシーを損ねるような対応・言葉がけはされていない。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の処方箋ファイルがあり、職員は内容を確認している。また服薬は二人の「職員で確認し飲み間違いの無いよう注意している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の生活の中で体操、散歩等実施している。誕生日には誕生会を行い職員手創りのカードを手渡している。干し物、たたみ物、掃除など日常生活の中でお手伝いして頂き役割と張りが持てるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	家族に働きかけ、お茶や食事に出かけた後、温泉に行くなど定期的に行っている利用者3名いる。また買い物やなじみの場所に行きたい希望のある利用者とはできるだけ希望に沿った外出ができるようにしている。	散歩を兼ね、近くにある同じ法人の運営する複合施設で行なわれる散髪サービスやゴミを出しに出掛けている。また、家族と食事やお茶、日帰り温泉に出掛ける利用者もいる。ホームの外出行事計画が立てられており、同じ法人の近くの複合施設のワゴン車や職員のお手伝いを頂き、花見や温泉、法人本部に附属するレストラン、ハウスでのミカン狩り等に出掛けている。利用者の希望に沿って買い物等の個別外出にも職員が同行している。	

グループホームぼうやま敬老園

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	一人一人の金銭管理力量を検討し家族とも相談の上 希望する利用者はこずかい程度のお金を持ち 一緒に店に行き買い物を楽しめるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話を掛けたいという希望があれば電話を貸し出したり家族からの電話を取り次いでいる。また個々に家族や知人に手紙を出す支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合った装飾品を飾り、季節感を取り入れ、照明・材質も温かみの感じられるものを使用している。	玄関から居間兼食堂、キッチン、トイレ、浴室など生活するための主要な共用部分がコンパクトな中に収められていて民家改修型の良さを十分に活かしている。掲示板も数カ所あり、七夕や夏祭り、法人運営のレストランでの食事の光景などのスナップ写真が貼られていた。利用者もパズルやぬり絵に興じたり、タオルたたみや豆わけなどの作業に動いている。利用者一人ひとりにお気に入りのスペースがあり、玄関脇のソファで昼寝をする利用者もいるという。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者同士で会話が楽しめる座席の配置を工夫したり身体状況によって座席を変えたりしている。また玄関横で職員の目の届くところに設置したソファは横になったり一人でいたい利用者のくつろぎの場所になっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には筆筒、、テレビ、仏壇など本人が必要と思うものが持ち込まれている。壁には誕生日のお祝いカードが飾られている。筆筒の整理や居室の清掃は職員と行い清潔に過ごせるようにしている。	民家改修のため増築された居室も多く、居室毎に広さは違うが、各居室には洗面台が備え付けられ、ベッドや車椅子などが置かれている。家族や外出時の写真も貼られ、整理整頓が行き届いた中で利用者が快適に暮らしていることが窺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ等の張り紙をし、わかりやすく表示し、混乱や失敗を防ぐ工夫をしている。また玄関はセンサーを設置し施錠はせず、利用者の離設を防止するようになっている。		